宣教と神学：ユダヤ人伝道の神学的位置づけ

2006年度 Spring
四月二十四日

目次:

宣教と神学の深い出会い	1
ユダヤ人伝道－教会の召命－	1
重要教理と些細な教えの扱い	2
歴史的前千年王国説と…	2
漸進的ディスペンセーション主義の前千年王国説と…	2
後千年王国説と…	3
無千年王国説と…	3
パネル・ディスカッション	3
当日の最新プログラム	4

【 お願い 】

当日の昼食は、受付にて弁当の注文を受け付ける予定です。ただ、今回の研究会はかなり大人数になることが予想されています。弁当屋さんにある程度の数の予約注文をいれる必要もありますので、参加希望者は下記の「安黒」まで出席者の名前と弁当の予約注文の有無をお知らせください。

Tel. 090-5064-7313（あぐろ）

教会と宣教とが漸進的に深く神学との出会いを

例年通り、クリスマス行事を終え、年も押し迫った2005年12月29日、日本福音主義神学会西部部会の理事会が開催されました。そして2006年の「春期研究会議」の相談がなされ、コーディネーターが数名選出されました。今回のテーマは〝宣教〟を重視する特長をもつ関西聖書学院で開催されることもあり、〝宣教〟という視点が提案されました。ただ、神学会は宣教大会とは異なり、宣教を考える上においても〝神学〟との関わりが考慮されなければその存在意義を失うことにもなります。

というわけで、〝宣教と神学〟という大枠が決定されました。このときに話し合いの基盤となりましたのは、「教会と宣教とが漸進的に深く神学との出会いを経験してきた」歴史的脈絡において開催されましたローザンヌ世界伝道会議とその結実としての〝ローザンヌ誓約〟でありました。福音派における宣教の〝マグナ・カルタ（大憲章）〟と言われています誓約です。最初はこの

今回の研究会の会場：関西聖書学院の正門

〝ローザンヌ誓約〟とその後の継続研究会議を含めてのローザンヌ運動の動向等を包括的に取り扱う内容の主題講演を、ローザンヌ会議の講師であり、また『ローザンヌ誓約－解説と注釈－』の翻訳者、論文集『ポスト・ローザンヌ』の編集者である宇田進先生に打診しましたが、健康に少し不安を抱えておられていましたので、話し合いを振り出しに戻し、検討をしました。

『ユダヤ人伝道－教会への召命－』

宣教と神学〟というテーマでは、大きすぎますので、各論として何に焦点をあてるかが議論とり、「世界宣教のためのローザンヌ委員会」において『ユダヤ人伝道－教会への召命－』（ローザンヌ宣教シリーズ No.60）が翻訳されることと、〝宣教と神学〟というテーマとして聖書解釈、終末論、千年王国説等の議論とかみあわせて、このテーマを扱うことは神学会としてふさわしいことではないかということになりました。

関西には福音主義神学会に属する多様な教派の神学校があり、それは神さまの大きな祝福を構成しています。ある神学者は福音派は〝一枚のモザイクの絵〟のようであると言っています。福音派は、「聖書は神の霊感によっ

重要“Crucial”な教理と些細“Trivial”な教えの扱い

て書かれた誤りのない神のことばである。」という点において一致しており、教理的にも主要な〝幹〟となる教理の大半において一致しています。ただ、〝枝葉〟となる部分での聖書解釈においては多様性がみられます。

今回のテーマと深い関係のある「終末論」においても「時間上の死、中間状態、再臨、からだの復活、最後の審判」という重要“Crucial”な教理について一致しています。しかし、「千年王国の理解、再臨についての理解（二重再臨か、単一の再臨か、大患難の前なのか、後なのか等々）」の些細（trivial）な教えにおいては聖書解釈の相違があります。

福音派の研究会議では、相違点をできるだけ扱わないで、一致点に比重を置いて取り組もうとする空気があるわけですが、今回は{「相違点を明らかにしつつ一致点“Unity in Diversities among Evangelicals”」を探求する機会になればと考えています。

今回は、長年それぞれの神学校で「組織神学」の科目を教えてこられた先生方が語ってくださますので、このテーマに関しては所属教派の教えのみならず、他教派の教えにも通じておられる先生方ですから、充実した中身と建設的な方向性を意識した議論が期待できると考えています。

発題と集会は、インターネットで同時中継され、後日ホームページ上にビデオ・ファイル掲載されます。また、希望者にはDVDによる提供もなされる予定です。

（コーディネーター長：安黒）

スタッフ・神学生の寮

1. 歴史的前千年王国説とユダヤ人伝道の神学的伝置づけ

関西聖書学院：安黒務

元々は、ディスペンセーション的な見方を教えられてきて、よく分からないまま受け入れてきましたが、エリクソン著『キリスト教神学』を翻訳させていただき、それをテキストとして「終末論」を何度か講義しているうちに、わたしはエリクソンの理解の方がよりすぐれた聖書理解であり、よりすぐれた聖書解釈であると思うようになりました。そして、エリクソンの理解の基盤にG.E.ラッドやJ.マーレーやG.ヴォスの聖書解釈があることも知りました。今回はそのあたりを紹介していきたいと思います。（1）「旧約聖書の預言的箇所」の聖書解釈の原則の検討（ジョージ・E・ラッドより）、（2）「ローマ9，10，11章の解釈」からのイスラエルの神学的位置づけ（ジョン・マーレーより）、（3）より困難の少ない見方としての「歴史的前千年王国説」（ミラード・J・エリクソンより）

関西には福音主義神学会に属する多様な教派の神学校があり、それは神さまの大きな祝福を構成しています。

2. 漸進的ディスペンセーション主義の前千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

福音聖書神学校：眞鍋孝

序論：福音主義神学者として、私たちは多くの点で一致している。共有する聖書解釈原理に立ち、真理の体系化を図っているからである。しかし、終末論に関しては、立場の大きな相違が存在している。何故か、今までの福音主義神学の研鑽の中で、一つの領域がクローズアップされてきた。それは、旧約のキリスト再臨、イスラエルの回復、救いの完成に関する預言部分の解釈が福音主義者間で鋭く対立しているという事実である。この問題と取り組む必要がある。この面におけるプログレッシブ・ディスペンセーション主義の聖書解釈の一貫性を紹介したい。

（1）キリスト再臨預言は、キリスト初臨の預言（旧約）と成就（新約）に見る解釈原理で解釈して終末論を構築すべきである。2～3の具体例を述べる。（2）上の議論で確認した解釈原理で聖書全体の終末に関する預言部分を解釈して神の救済史に図表化すれば、以下のようになる。図表の提示。（3）時間の許される範囲内で、イエス・キリストの終末講話；Ⅰ、Ⅱテサロニケ；ダニエル等の聖書記事を検証する。

結論：福音主義者として今後とも互いにみことばの研鑽に励み、終末論、また、イスラエルの回復についても聖書の啓示事実と合致する理解に到達したい。

3. 後千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

神戸神学館：滝浦滋

現在の準備の段階での要点にすぎませんがとりあえずお送りします。

1）聖書の骨格としての「契約」（特にアブラハム契約の第三点）、2）聖書啓示の進展を「王権と王国」について見る、3）「神の王国」のキリスト初臨後の「現実性」「地上性」と特質、4）千年王国預言とピューリタンらの希望、5）近代福音主義の現実逃避傾向の克服としてのポストミレ

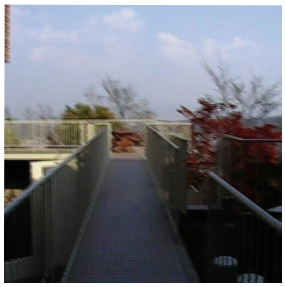
4. 無千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

神戸改革派神学校：市川康則

私の今の計画としては以下のとおりです。

1）「“ア”ミレ」の真義について――黙示録解釈と「千年支配」（20章）の意味、2）「全イスラエルが救われる」（ロマ11：25）とは、3）神の契約の真実（信実）性・一貫性――イスラエル・キリスト・教会、4）教会の唯一性・公同性とイスラエルの躓き、5）教会の“負債”としてのイスラエル宣教、6）実際的諸問題

集会場と吹き抜け



美しい空中回廊

パネル・ディスカッション

神戸ルーテル神学校：正木牧人

さて、午後のパネルの件ですが、午前の4名の発表者の先生方に加えて、準会員の他の神学校の先生方にも前に一緒にすわっていただいて、しばらくまずClarificationの質疑応答をしたいと思います。

さらに、午前の発題で見えてくるいくつかのポイントをとりあげて、同じ質問を全員になげかけるようなことはどうかな、と考えています。そして、フロアからの質問を受け付けますが、時間の関係もありひとつひとつ受けないで、次々に質問のみを受けていき、ころあいをみて質問をいくつかのカテゴリーにまとめて、一括してパネラーに答えていただく、という形はどうかな、と思っています。

パネラーが多くなるので心配されるのは焦点がぼけることですね。これは避けたい。そのためには、午前の発題の先生方から、メモ的なものであっても発題の内容の紹介が事前に必要ではないか、と思われます。それを事前に読んでおいていただくことでパネラー間にただようかもしれない場当たり的な雰囲気を回避することができます。

そうでなければ/それとともに、準備委員の方からお願いする際に、かなりよく説明することで、全体の焦点が定まった討議ができると思います。

私の感じでは、終末論の立場の違いに焦点が行くよりも、それらの違いはあってもユダヤ人宣教が今の時代にどのような重大な意味を持つのか、ということが多角的に把握されるような会になれば、新しい発見の連続のような刺激に満ちたものになれば、と思います。宣教学会、聖書学会などにはできない、福音主義神学会ならではの討論ができればと願っているわけです。

ローザンヌの資料のことですが、邦訳はほぼ完成していますが、まだ私も原稿を手にしていません。Http://www.lausanne.org から入ればLOPsのpdfの形式でのダウンロードが可能です。

今回は、かなり難しいテーマでもありますので、参加される方にできるだけ全体の情報を提供させていただき、そのことにより建設的な研究会議となることを目指しています。ただ、発題してくださる先生方のアウトラインは暫定的なもので、準備経過の中で多少の変更もあることをご了解ください。

窓からの風景

日本福音主義神学会　西部部会

春の研究会議・総会のご案内

Mission & Theology： Jewish Evangelism

1．日時　：　2006年 4月24日（月）10:00am－4:30pm

2．場所　：　関西聖書学院　(KANSAI BIBLE INSTITUTE)

〒630-0266 奈良県生駒市門前町 22-1 【TEL.0743-70-8600】

3．主題　：　宣教と神学　：ユダヤ人伝道の神学的位置づけ

今回は奈良に移転しました「関西聖書学院」の新校舎で開催されることとなりました。MTCのコースを持ち、宣教に深い関心を寄せるこの神学校で**歴史を通じて“ホット”なテーマである「ユダヤ人伝道」**を、神学会を構成している特色のある幾つかの神学校から**「終末論－千年王国説－ユダヤ人伝道の位置づけ」の神学的視点**を紹介しあい建設的な対話と議論を通じて会員相互の理解を深めることができたらと考えています。

4．プログラム　（敬称略）

10:00　　受付：（10:00-10:30　理事会）

10:30- 10:40　開会礼拝：賛美・祈り（福田充男）・歓迎の言葉（大田裕作）

10:40- 10:50　研究会議導入・午前の集会進行（福田充男）

【 発題 】

10:50-11:15『歴史的前千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ』 安黒　務

11:15-11:40『漸進的ディスペンセーション主義の前千年王国説と
ユダヤ人伝道の神学的位置づけ』眞鍋　孝

休憩　10分

11:50-12:15『後千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ』 瀧浦　滋

12:15-12:40『無千年王国説とユダヤ人伝道の神学的位置づけ』 市川康則

12:40－ 1:30　昼食　　1:30－2:00　総会

2:00－ 4:00【 パネル・ディスカッションと質疑応答 】：司会 正木牧人

主題　－ユダヤ人伝道の神学的位置づけ－

パネラー：研究発表者と他の神学校の組織神学教師も加えて

4:00－4:30 閉会礼拝：全体の総括・賛美・献金・祈り：（鷹取裕成）

（コーディネーター：眞鍋、福田、正木、安黒）

1 ジョージ.E.ラッドの

歴史的前千年王国説

とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

一宮基督教研究所
安黒　務
http://www.aguro.jp/
http://iciici.intranets.co.jp/
aguro@mth.biglobe.ne.jp

2 歴史的前千年王国説と
ユダヤ人伝道の神学的位置づけ

- 序
1. 預言的聖書箇所の解釈の原則の検討
2. イスラエル民族の神学的位置づけ
3. 神の国の概念と千年王国
- 結び

3 •序：私自身の系譜①救い

- 関西学院大学時代：雑多な救いの背景
  1. 接点：映画・特伝集会『ここに愛がある』本田弘慈先生（ホーリネス派）
  2. 導き：KGK（キリスト者学生会）キャンプ－片岡主事（ルーテル派）、真鍋夫人（メノナイト・ブレザレン）
  3. 所属：スウェーデン・バプテスト系諸教会をベースにするオレブロ・ミッション－日本福音教会（Japan Evangelical Churches）（カリスマ派）
  4. 養い・交わり：山中良知先生研究室（改革派）

4 序：私自身の系譜②霊的養い・神学教育

1. KGKにおける超教派の交わり：超教派的思考を身につける
   1. 関西学院大学の聖書研究会ポプラ、KGK春季学校・夏季キャンプ
2. 関西学院大学経済学部：宗教社会学的思考を学ぶ
   1. 御言葉による直観的召命観ではなく、天職を求めての葛藤－天川潤二郎ゼミ－卒論テーマ『天職意識の喪失過程－英国の産業革命前後の経済における宗教的基盤についての研究－』
3. 関西聖書学院
   1. 三年コース卒業：キリストを愛し、聖書を愛することを学ぶ
4. 神戸改革派神学校
   1. 部分聴講：キリスト教哲学を学ぶ
5. フラー神学校宣教学部：
   1. 世界宣教の大切さを学ぶ－グローバル・エデュケーション・プログラム
6. 東京基督教大学の共立研究所（卒業）、東京基督神学校（聴講）：
   1. 宇田進師に師事し、宣教学の最先端の学びと福音主義神学のエッセンスを徹底的に身につける－三年間で、共立と東京基督神学校のほとんどの科目を、聖書神学・歴史神学・組織神学部門を徹底的に学ぶ

5 序：私自身の系譜③神学研究

1. 初期の学びの助けになったもの－救済論中心
   1. 聖書：ハーレイ著『聖書ハンドブック』
   2. 義認と聖化：ウォッチマン・ニー著『キリスト者の標準』
   3. 聖霊の満たし：R.H.カルペッパー著『カリスマ運動を考える』
      1. ヘンドリクス・ベルコフ著『聖霊の教理』
      2. J.D.G.ダン著『イエスと御霊』
      3. J.V.テイラー著『仲介者なる神』
2. 現在の取り組み－包括的な神学の研究
   1. 歴史神学：宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』、『総説現代福音主義神学』、他
   2. 組織神学：M.J.エリクソン著『キリスト教神学』、他
   3. 聖書神学：G.E.ラッド著『新約聖書神学』、『新約聖書批評学』、他

6 序：今回の発表の輪郭①

1. 福音主義神学陣営の一員として
   1. 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』、『総説現代福音主義神学』
2. スウェーデン・バプテスト系の伝統の中に生きる者として
   1. M.J.エリクソン著『キリスト教神学』
3. エリクソン著『キリスト教神学』の終末論理解の文献資料源は何か？
   1. G.E.ラッド著作集をベースにしている

4. ラッドの著作集は、どのような神学書をベースにしているのか？
    1. 厳密な聖書解釈において貢献してきた
        1. ゲルハルダス・ヴォス著『聖書神学』、『パウロの終末論』
        2. ジョン・マーレー著『ローマの信徒への手紙』

7 序：今回の発表の輪郭②

1. 「ディスペンセーショナルな前千年王国説」の影響の
    強い背景の中にあるバプテストの流れの中にいたエリクソンやラッドが、
2. 「後千年王国説」「無千年王国説」の背景をもつ、
    ヴォスやマーレーの聖書解釈の適切性を認識し、
3. 「ディスペンセーション主義の影響」の課題を克服しつつ、
    教会の歴史の最初の時期の認識であり、継承されてきた
4. ″歴史的„ 前千年王国説として再提起している。
    ヴォスやマーレーの厳密で正確な聖書解釈においては、
5. 福音派全体としての ″共通項„ を
    確認できるのではないか。
    その ″共通項„ に立ちつつ、多様な千年王国説が形成されていく
6. プロセスを丁寧に検証することが大切である。

8 序：今回の発表の輪郭③

1. G.E.ラッド著作集の中で、今回のテーマを分かりやすく、扱っている文献は何か？
2. “The Last Things” George Eldon Ladd
    1. How to Interpret the Prophetic Scriptures（1章）
    2. What About Israel ?（2章）
    3. The Kingdom of God（9章）

9 1．預言的聖書箇所は どのように解釈すべきなのか？

1. 共通する聖書観－方法論の問題
2. 全聖書はひとつの結論を導き出すのか
3. 二つの異なった主題
    1. 旧約－イスラエル民族
    2. 新約－キリスト教会
4. 二つの異なった回答
    1. ディスペンセーション主義
    2. 啓示の漸進性を認識する立場（G.ヴォス、G.E.ラッド）
5. 三つのメシヤ的人物像
    1. ダビデのような王：イザヤ11章
    2. 神とともに天の御座に：ダニエル書7章
    3. 苦難のしもべ：イザヤ53章
6. 基本的な聖書解釈方法
    1. イエスの人格・使命の視点において旧約聖書の預言を再解釈
    2. キリスト論であれ、終末論であれ－教理における最終的な言葉は新約聖書の中に

10 【挿入】聖書ハンドブックより

旧約聖書における三大思想の発展の段階

1. メシヤの国民：アブラハムへの祝福の約束
    - ヘブル民族は、この民族を通して全世界が祝福されるために創始されたものである。
2. メシヤの家族：ダビデへの約束
    - ヘブル民族が世界を祝福する方法は、ダビデの家の者によってである。
3. メシヤ：イエスの誕生
    - ダビデ家の者が世界を祝福する道は、その家の者（家系）のうちに生れるひとりの偉大な王によってである。

11 2．イスラエル民族の神学的位置づけ ①聖書解釈の原則

1. 旧約聖書は、イエス・キリストにおいて与えられた新しい啓示の視点で解釈
    1. 新約聖書がイスラエルについて教えているものは何か？
    2. 旧約聖書は、イスラエルの未来における救いを望み見ている
2. 新約聖書は、教会において霊的に成就されるべきであると、それらの預言を再解釈しているのか？
    1. 教会は新しい、真のイスラエルなのか？
    2. あるいは、神は依然として、彼の民イスラエルのための未来をもっておられるのか？

12 ## 2. イスラエル民族の神学的位置づけ
②ローマ書9-11章の教えの検討（a）

1. 記述の動機：パウロの心の痛み(9:2)
2. 最初のポイント
    1. 「イスラエル」、真の霊的イスラエル、神の民は－アブラハムの血縁的子孫と同一ではない。（9:6,7）
    2. 神は、イサクを選び、イシュマエルを斥けられた。（9:8）
    3. この原則はローマ書の最初にも記述（2:28,29）
    4. この原則－パウロが創始したものではない。
        1. 旧約にすでにあった。（エレミヤ4:4）
        2. ヨハネの記述（黙示録2:9,3:9）

13 ## 2. イスラエル民族の神学的位置づけ
②ローマ書9-11章の教えの検討（b）

1. パウロの思想
2. 第一義的に、贖罪の歴史において、
    1. アブラハムに与えられた約束の
    2. 相続人ヤコブの神の主権的選び
3. イスラエルの不信仰
    1. ホセア書－「姦淫の女をめとれ」－イスラエルの霊的状態の象徴
4. イスラエルに対する神の拒絶
    1. 最終的でも、回復できないものでもない
    2. 未来におけるイスラエルの救いへの言及

14 ## 2. イスラエル民族の神学的位置づけ
②ローマ書9-11章の教えの検討（c）

1. 神は、彼の民を保護されてきた。（11:16）
    1. すべてのイスラエルが依然として救われるべきである。
2. イスラエルの救いは、
    1. モーゼのいけにえの体系の再興と、ともに再建されたユダヤ人の神殿によるのではなく
    2. 教会とともにすでに確立されたキリストの血においてなされた新しい契約を通してでなければならない。
3. イスラエルは、「預言についての時刻表」ではない。
    1. イスラエルのパレスチナへの帰還は、おそらく、イスラエルに対する神の計画の一部分ではある。
    2. しかし、新約聖書はこの問題について明らかに語っていない。
    3. しかしながら、世紀を通じての民としてのイスラエルの保護は、神の民イスラエルはしりぞけられていないというひとつのしるしである。

15 ## 2. イスラエル民族の神学的位置づけ
②ローマ書9-11章の教えの検討（d）

- **ジョン・マーレーの解釈**

1. 一部のイスラエル人が頑なになったのは、異邦人全体が救いに達するまでである。
    1. 頑なになったのは、一部の者であって、全体ではない。
    2. 一時的であって、最終的にではない。
2. 頑なになることに終わりがくる。
    1. 文脈的考察－「選ばれた者の総数」との解釈を妨げている。
    2. イスラエルの「皆」fullnessは、イスラエルの選ばれた者の皆ではありえない。
3. 民族としてのイスラエル人の大部分の救いがある。
    1. この「皆の救い」は、イスラエルの罪と失敗に対象されているので、
    2. 「全体としてのイスラエル」の信仰と悔い改めへの回復のこと。
    3. もはや残された者が救われる時ではなく、「イスラエルの大部分の者」が救われる状況を心に描いている。
    4. 「イスラエルの皆の救い」は、異邦人に非常に大きい祝福をもたらす。
    5. 民族としてのイスラエル人の救いにおいて、「キリストを信じる信仰」以外の特権や身分の暗示は見られない。

16 ## 3. 神の国

1. 「神の国」－イエスの教えにおける中心主題
    1. 「神の国」の二重性：現在性と未来性
    2. 贖罪の歴史－「主の日」によって二つの時代に分けられる
2. パウロ－キリストの勝利的支配について
    - 15:23 しかし、おのおのにその順番があります。
    - まず初穂であるキリスト、
    - 次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。
    - 15:24 それから終わりが来ます。

17 ▭ 3. 神の国

1. 贖罪の歴史の目標・ゴール：神の国
    1. 神の国の「終末論的側面」
    2. いつ、どのようなかたちで「神の国」は来るのか？
2. 「主の日」についての見方
    1. 単一の複合的な出来事：遠方の山のように
    2. 主の日、人の子の来臨、死者の復活、最後の審判：ひとつの山なみとして

18 ▭ 3. 神の国：
「千年王国」についての神学

1. 後千年王国説：
    - 勝利的宣教、キリストの霊的支配による変革、楽観的見方
2. 無千年王国説：
    - 文字通りの千年王国はない、霊的に解釈、悲観的見方
3. 前千年王国説
    1. ディスペンセーショナルな前千年王国説
    2. 歴史的前千年王国説
        1. ディスペンセーショナルな立場がもつ課題への取り組み
        2. 後千年王国説・無千年王国説のすぐれた点も包括

19 ▭ 3. 神の国

1. ヨハネの黙示録において
    1. この時間的枠組みー修正されている。
    2. キリストの再臨における単一の出来事において生起するキリストの勝利→サタンに対する勝利は二段階で起こる（黙示録20章）
2. 第一の復活（20:4,5）：
    1. サタンの投獄は一千年間続く（20:2,3）、
    2. 殉教者は、一千年間の最初に復活し、キリストとともに支配する。
3. 第二の復活（20:5）：
    1. 死者の残りの者は、一千年の終わりに復活し、
    2. 火の池に投げ込まれる（20:10）。

20 ▭ 3. 神の国

1. 来るべき時代が開始される前に、
    1. 一千年間、歴史の中で、地上におけるキリストの支配が予想されている。
2. 千年期前再臨説ー最も自然な解釈、
    1. キリストの一千年間の支配を教えている唯一の箇所 、butこのことは反対の論拠にはならない
    2. 旧約聖書の預言者
        1. 教会の時代を予想していなかった。
        2. 主の日とその中でのイスラエルの役割の視点において、その未来を一緒に見ていた。
        3. 遠くの山々を眺望ーひとつの山と見えるが、山と山の間には谷がある

21 ▭ 3. 神の国：ディスペンセーショナルな前千年王国説の特徴①

千年王国の時期の理解

1. 第一義的にユダヤ人のためのもの
    1. イスラエルの国土の回復
    2. 神殿の再建
    3. 旧約聖書時代のいけにえの体系の再設立
    4. 民族としてのイスラエルについての旧約聖書預言のすべては、文字通り成就する
2. 神は、二つの異なったプログラムと異なった祝福をもつ、イスラエルと教会という二つの別個の、分けられた人々をもっておられる。
    1. イスラエルに対する神のプログラムは、神政国家であり、地上にあるものである。
    2. 教会に対する神の目的は、普遍的で霊的なものである。

22 ▭ 3. 神の国：ディスペンセーショナルな前千年王国説への反論①

1. ヘブル8章
    1. 型と影の時代
        1. 旧約の礼拝組織－礼拝において描かれていた実体がキリストにおいてもたらされたときから、廃止された。
2. ローマ11章
    1. 教会＝霊的イスラエル
        1. 文字上のイスラエルは、まだ再びオリーブの木に接木されうる。そして真のイスラエルに含まれる。
        2. それゆえ、第一義的にユダヤ的特徴をもつものとして、千年王国をみることは不可能である。

23 ☐ 3．神の国－キリストにおける神の贖罪的支配はどこで始められるのか？

1. キリストの復活－それ自身終末的事件
    1. 死者からの初穂－終わりの日の始まり
2. 神の国の現在性
    1. 実現された終末論
    2. 終わりの日の出来事の断片－歴史の只中に植えつけられた

24 ☐ 3．神の国－「終わりの日」について

1. 聖書－「終わりの日」としてこの時代について語っている。
    1. 2:17『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。
    2. ペンテコステの日に、御霊を注がれたとき
    3. ペテロ－御霊の賜物についてのメシヤ的預言を引用（使徒2:17）
2. 旧約聖書において－「終わりの日」は
    1. 歴史の終わり－神の終末における王国の時代＝メシヤの時代（イザ2:2、ホセア3:5、エレ23:20）
3. ペテロ－「終わりの日」を歴史の中に
    1. 「主の日」は－まだ未来にある。（使徒2:20）
    2. 「主の日」は－「終わりの日」によって先行されている。

25 ☐ 3．神の国－「終わりの日」の二重性

1. 聖書－「終わりの日」としてこの時代について語っている。
    1. ヘブル1:2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。
    2. 多くの福音主義の神学者－「終わりの日」－終末直前の最後の時代として
2. 新約聖書－イエスとペンテコステによって導入された新しい時代として引用
    1. クリスチャン－ふたつの時代に生かされている
    2. クリスチャン
        1. すでに来るべきいのちと力を経験しているゆえに
        2. 来るべき時代を相続するように運命づけられている

26 ☐ 3．神の国：千年王国説の議論の解決

1. **それぞれの説**
    1. 一長一短であり、疑問の余地のない見方なし
    2. このような場合－より困難の少ない見方を見出す努力をすべき
2. **後千年王国説**
    1. 福音宣教における楽観主義 vs 信仰がさめるとの記述
    2. キリストの肉体的存在なしの地上支配の描写なし
3. **無千年王国説**
    1. 前千年王国説の概念－単一の聖書箇所に依拠と批判
    2. 教理－単一の聖書箇所に依拠すべきものでない
4. **歴史的前千年王国説**
    1. ひとつの見方が、もう一つの見方ができるよりも、さらにより良いかたちで特別な箇所を説明できる
    2. 黙20章の「二つの復活」に対する無千年王国説の説明の困難さ－聖書解釈の原則をまげることになる
    3. 単一の聖書箇所に依拠するものではなく、それを暗示している多くの聖書箇所あり（Ⅰコリ15:22-24、ルカ14:14;20:35、Ⅰコリ15:23、ピリピ3:11、Ⅰテサ4:16）
    4. 二段階の復活（ダニエル12:2、ヨハネ5:29）
5. **関連する聖書箇所への『適合性』**の観点から－前千年王国説が**より自然な解釈**

27 ☐ •結論

28 ☐ 関連サイト

- http://www.aguro.jp/
    - 一宮基督教研究所サーバー：
        - 約30年間の安黒務の小さな研究の積み重ねを掲載。
- http://iciici.intranets.co.jp/
    - 一宮基督教研究所イントラネット：
        - 今回の研究会のパネル・ディスカッションの継続的展開の場を模索して、再開させていただいたネット上にあるグループ・ソフトウエア
        - 参加希望者は、下記の安黒のメール・アドレスに「ICIイントラネットへの登録案内状を送ってください。」とメールください。（無料）
        - aguro@mth.biglobe.ne.jp